
果てしないこの世界

Y U E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果てしないこの世界

【Nコード】

N3083K

【作者名】

YUE

【あらすじ】

これは、

全てを失った少年と、一人ぼっちの少女の物語。

序章（前書き）

これは、

全てを失った少年と、一人ぼっちの少女の物語。

序章

「行って……、しまつの？」

震える声で彼女が言う。

澄みきった海のように青い瞳が少年を見つめる。

「ああ、もうここには居場所が無いからね。」

少年は未練の無い、諦めた様な顔で言った。

長いつき合いではあるが、まさか夜明け前に国を出る門の前で、待ち伏せされているとは思っていなかった。

相変わらず、彼女の行動の速さには驚かされる。

「居場所がないって！騎士の称号を剥奪された、だけでしょう？」

彼女が何かを訴える様に言う。

「また、やり直せば……。」

「もう、あの頃に、戻ることは出来ないんだよ。」

「っつ………!!」

少年が突き放す様に言った。

彼女はそんなことを言われるとは、思っていなかったのか驚いて、言葉に詰まった。

「それに国王に、一刻も早くこの国を出るように、言われているからね。」

「えっ?」

これは彼女も知らなかったのだろう。明らかに動揺している。

「そんな!? お父様が……? どうして……。」

この件に自分の父親であり、この国の国王が、係わっているとは彼女、この国の王女であるアイザール・フラン・ユーディリアには信じられなかった。

「貴方、^{あなた}いったい何をしたの!？」

ユーディリア、(長いのでユリアと呼んでいる)が問い詰める様に言う。

「精霊の契約による召喚魔法の暴走。」

少年が簡潔に答える。

「それは知っているわよ！でもたったそれ位で……。」

「死人が出たんだよ、事故に巻き込まれて。」

「それも、知っているわっ！でも……、でも……。」

ユリアの声が、だんだん小さくなっていく。

「でも、貴方あなたが国を追放されるなんて、いくら何でもやりすぎです！お父様に直訴じきそします。」

ユリアはそう言うと直ぐに王宮へ少年の手を取って行くこととする。

だが、それを少年はユリアの手を乱暴に払いのけ、邪魔まじまをする。

「……………!?!」

払いのけられたのが信じられない、そんな目で少年を見る。

「国を出るのは自分の意思いしだよ。追放命令は受けていない。」

そんなユリアに少年は事実を伝える。

「えっ……………?!」

ユリアが擦れた声で言う。

「どうして？」

縋る様に、目に涙を溜めて、ユリアが言う。

「これ以上、僕が君の傍に居るとユリア、君に被害が及ぶ可能性があるからね。

貴族でもない僕が君の傍に居ることで、何かと気に食わない連中は多いから、このさい徹底的に潰そうと動く者も居るだろうし。

国王はそれに君を巻き込みたくないのだろうな。

それに連中から逃げるなら早い方が良いからね。」

少年は早口で理由を述べた。

「なによ、それっつ！……結局はただ此処から逃げたいだけじゃないの！」

ユリアはひどく腹を立てて言った。

「いつもそう、大切な時にはいつも居なくて！」

傍に居て欲しい時にいつも逃げてっ！

貴方にとって、私は何？

私は……、わた、…し…は……っ！」

ユリアは、その胸に秘めている、閉じ込めることの出来ない、思い、感情を吐き出そうとする。

言葉に詰まり、目に涙を溜めて、今にも泣きそうな声で。

「私は、あ…。」

だがその言葉は少年によって遮かざられる。

「君は僕が仕える主ぬしで、それ以上でも、それ以下でもない。

そして騎士の称号も剥奪された今、もう僕は君の騎士でも無い。」

少年は先にユリアが何か言う前に、ユリアの質問に答えた。

そしてその答えはユリアにとって、残酷ざんこくなものでしかなかった。

「そう…、分かったわ…。」

ユリアはそう言って背を向けて走り去って行く。

目に溜めた涙が流れるのも気にせず。

「さよなら、ユリア。僕の大切な人。」

少年はユリアが見えなくなってから、そう言った。

これで、地位も、称号も、名誉も、絆も全て失った。

この国に在った少年を繋ぐものは、もう何も無い。

少年は最後に自分の居た王都を眺めて、思う。

もう此処には戻らないだろうと。

そして、最後にユリアに合えて良かったと。

別れがあのような形でも、これで心残りが無くなった。

少年は右手を胸に当てて、自分が育った国に別れを告げ。

門を通り、国を出た。

ユリア

少年が門を通り、国を出た後。王女ユリアは一人、自分の部屋で泣いていた。

「私は、貴方あなたに此処ここに居てほしい。」

一人しか居ない部屋で、ユリアは少年に言うはずだった言葉を言う。

その言葉は少年に届く事は無い。

それでもユリアは言う。

「あなた貴方が好き。」

この思いは胸に閉じ込めることが出来ないから。

序章（後書き）

第一章 夜の雨と少女

雨。

雨の中、少女が一人、暗い夜の森を力なく歩いていった。

少女以外、誰も、何も、存在しない雨音だけが響く森。
少女を照らす光は何もなかった。

薄暗い闇の中で雨音にまじって木々がざわざわ揺れる。

影はもう追ってこない。

さっきまで少女を追っていた影はもうどこかに行っていた。

私はいったいどこに向かっているのだろう。少女はふと思った。
ただ必死で影から逃げてきた。行く当てなんて、どこにもなく逃げていた。

何故こうなったのか。

私がいいた場所に黒い影の様な者が襲って来て、私の居場所は炎に包まれた。

なぜ？

なぜ私ばかりこんなめにあう？

そんなことを考えていると不安な気持ちになり体が震え、怯える。

孤独、不安、絶望、行く先の見えない恐怖。
そんな感情がいつきに心を襲い突然、目の前が真っ暗になった。

私は一人だ。

歩んでいた足を止めその場に座りこむ。

怖い、ただひたすら逃げることでしかできない弱い自分。
だれかに助けてほしい。救ってほしい。

でも私は一人だ。

一人にはなれている。どこにいても、いつでも私は一人だった。
私とゆう存在はそこにいるだけで他人に嫌われる。他人は私を忌
み嫌う目で見えない。

私はいつも一人だった。

じゃあ何故。

私は今、怯えている。

私は一人。

そんなことを考えていると、急に激しい痛みが体を襲ってきた。
襲われて傷ついた体を無理に動かしたから、今になって体中に痛
みが走ったのだ。

「つつ……。このままじゃあマズイ……。」

このまま、この森に居ればまた襲われるかもしれない。

しかし、少女の体は傷だらけでもう立っているのがやっとだった。

空を見上げても、夜の雨空で光なんて見えない。存在しない。

それでも光を求めるように手を伸ばす。

意識が薄れてきて、もう足に力が入らない。

「夜の雨って嫌いだな……………」

そう言って自分の身に降りかかる冷たい夜の雨を受けながら、少女は気を失ってしまった。

第二章 旅の少年

雨の降る日。

ある、小さな町に一人の旅人がやってきた。

町の入り口には「行き止まりの町」とまるで皮肉のような立て札があり、雨が降っているにしても町に活気が全く無い。

そんな町についた旅人は、一つの店を見つけるとそこに足をはこんだ。

酒場である。

旅人は、酒場の木で作られた扉を、ギーと木が軋む音を立てて開けると、中へ堂々と入って行った。

酒場には数人の人々がいて、酒を飲みながら雑談をしていた。そのほとんどが町の人であり、突然の外からの旅人に少し驚いていた。

この町は、国の都市から、かなり遠い場所にあり、町の先には魔物が住む森しかなく、町なんてない。

そして、この魔物の住む森だが。

魔物はその強さによってA・B・C・D・Eとランク分けされて

いる。

ハンターやダンジョンもこれと同じ様にランク分けされている。

そして、この森に住んでいる魔物は主にA〜Bランクが多い。
ダンジョンランクで言うならAランクに指定されている。

故に「行き止まりの町」。

簡単にはこの森を通ることはできない。

もし、この森を通るのなら少なくともBランク以上のハンターではないと無理だ。

この町に来る人と言えば、商いをしにくる商人ぐらいだ。
なので、人々は突然の旅人に、興味をもった視線を向ける。

旅人はロングコートにぶかぶかのフードを被り、背中には大剣と荷物袋を背負った者で、一見、大人かと思ったが、フードから覗く顔を見るとまだ幼く、一五〜一六歳といった少年だった。

少年は、町の人々の視線を完全に無視し、奥のカウンター席に荷物を置いて座り、酒場の主人に簡単な食事と飲み物を頼んであとは大人しく料理が来るまで椅子に座る。

この町にも、旅人が来ない事はない。だが、その大半は道に迷っ

た者や物資の補給に立ち寄った程度の者ばかりだ。

だが、ごく稀に魔物の森に行くために、この町に来る者がいる。

腕試しにと少しは名のあるハンター。

生きる希望を無くした人。

そして……。

「で、お前さんは何でこの町に来たんだけ？」

酒場の主人が少年の頼んだ料理と飲み物を持ってきて、少年に尋ねた。

酒場にいる人々は酒場の主人のその言葉を聞いて、耳をそちらに向けた。

「亡命です。」

少年は酒場の主人の問いかけに、一言で答えた。

その一言で酒場の雰囲気が変わった。

亡命、もしくはこの国から逃亡しようとする人が、この町に来ることはたしかにある。

しかし、この町に来た逃亡者は誰一人として隣国へはたどり着くことはできない。

隣国に行くには、魔物の住む森を通らなければならないからだ。

そして魔物の住む森を通ると言うことは事実上、死に行くようなものだ。

酒場にいる人々はその言葉を聞いて、向けていた耳を外してテーブルに勘定を置いて、さっさと店をでた。皆、関わりたくは無いだ。

「お前さん、お尋ね者か？」

酒場の主人はさっきまでいた客の置いていったお金を集めながらそう、少年に客が「亡命」と聞いて逃げた一番の理由を聞いた。

隣国の、それもわざわざこの魔物の住む森を通って逃げるのだから、それなりの理由があるはず。

なのだが、この少年にはなにか不思議な感じがする。

「ええ、……そのような者ですかね。」

心配しないで下さい、町の人に迷惑はかけません。」

少年は料理を食べながら酒場の主人に答えた。

この国で犯罪を犯し、魔物の住む森から隣国に逃げようとする者は少なからずいる。

だが、酒場の主人は、少年の佇まいや料理を食べる仕草そして、少年の持つ武器を見て、そんな奴らとは違う。

ただのお尋ね者では無いと思った。

本来なら学生として学校にでも通っていきそうな年齢なのだが。

この少年はかなりの修羅場を踏んでいると見える。

まず、少年の持つ武器だが、大剣と言っても普通は自分の身より一回り小さく腰に装備する程度のサイズなのだが、少年の持つ大剣は余りにも大きすぎた。

軽く少年の身の丈はある物で背中に背負っている時点ですでに規格外な代物である。

しかし少年は、そんな代物を体の一部のように今も背中に背負っているながら料理を食べている。

これだけの大きさだから、かなりの重さになるはずなのに。それに大剣を見ると所々に戦闘で付く傷がある。

少年は少なくとも、この大剣を使いこなしている。

おまけになにか、やっかいな呪が大剣に付いているようだ。

長年この酒場で、魔物の住む森を通る者を見ている、酒場の主人だから分かるのだ。

「止めはしないが、ここの魔物の森は他のダンジョンとは桁が違うぞ。それに亡命と言うなら森を越えなければならぬ。後戻りはできないぞ。」

酒場の主人は一応、警告のためにそんなことを言ったが。

「大丈夫ですよ、腕に自信はあります。」

それにもうこの国に、自分の居場所なんて在りませんから。料理、美味しかったです。ごちそうさま。」

少年はそう言って席を立った。

「まちなっ！」

そのまま酒場の主人に、勘定を払おうとしたとき酒場の主人が少年を呼び止めた。

「金是要らねえ、俺の奢りだ。」

それとこれ持っていけ。」

そう言って酒場の主人は店のカウンターから袋をとりだした。

「中に薬草やら色々、使える物がある。餞別だ、持て行け。」

せんべつ

酒場の主人はその袋を少年に投げた。

「ですが……。」

少年が何か言おうとすると、酒場の主人が。

「気にするな。俺は長い間ここで酒場をしていて、お前と似たような状況の奴も何人か見てきた。」

だが、お前ほど若い奴はいなかった。

見送る側としては、これくらいいしないとな、気が済まないんだよ。なにただのお節介ってやつだ。」

酒場の主人はそれだけ言ってカウンターの奥に引っ込んでいった。

少年は無言で酒場の主人に礼をして酒場をでた。

「居場所が無い、か……。十五、十六歳のガキの言う台詞じゃないな……。」

酒場の主人はだれもいなくなった酒場で、静かに物思いに沈んだ。

第二章 旅の少年（後書き）

終業式が終わり、ようやく春休み。

無事、三年に進級できると聞いて安心した。

いや正直、今回はヤバイと思ったので良かったよ、ほんとに。

これで心残りも無くなり、執筆スピードが上がるかと言つと。

それでも無い。orz

はぁ。

早く文章が上手く書けるようになりたい。

ここまで読んでくれて、ありがとうございます。

b
y
Y
U
E

第三章 魔物の住む森

月の光だけが輝く夜。

昨日まで降っていた雨は何時の間にか止んでいた。

そして、魔物の住む森の入り口の門。その前に少年は立っていた。「行き止まりの町」から、6〜7?進んだ先にそれはあった。

見るからに巨大な門で、鉄格子で出来ている。

そして、その鉄格子は植物の蔓の様な形をしている。

おそらくこの魔物の住む森に、入らない様にするための物なのだろうが。

森の入り口に建つその門はまるで、侵入者を入れないための門ではなく、誰かを幽閉し、閉じ込めるための牢屋の様にも見える。

そんな威圧感がする門を、少年はなんのためらいも無く、手で押した。

門は意外にも簡単に開き、少年を通した。

どうやら門はだだの飾りみただ。

少年は魔物の住む森の中に入って行った。

ここで余談、ダンジョンについて。

ダンジョンとは主に、魔物が多く住む、森や遺跡などに付く名称で、一般の人が入るには危ないEランク。Dランク以上はハンター

や何らかの称号を持つ者でもそのダンジョンレベルに見合う腕のある者でないと危険と言うレベル。

ちなみにこのダンジョンレベル、どの様にして決められているかと言うと、主にそこに住む魔物のランクで決められている。

魔物のランクは、駆け出しのハンターでも退治できる小魔獣などの比較的ニゾばかりのEランク。Dランク以上は魔物の強さ、凶暴性、その能力によって振り分けられる。ハンターはこの魔物の相手にふさわしいレベルの腕を持つ者で分けられている。

中にはSランクと言う桁外れに強い魔物や、今ではほとんど目撃例がなく幻と化した幻獣と言われるものが居るが、おとぎ話に出てくるようなもので、まず見ることは無い。

はい、余談おわり。

話を少年に戻して。

少年は魔物の住む森をもつ、かなり進んでいるのだが。

「変だな。」

闇の中で異変に気がつき一度立ち止まる。

魔物が現れない。

ここは、ダンジョンランクAで魔物のランクが高く数が多い事で魔物の住む森と名前が付いている。

そして魔物は夜になると活動が活発になる物が多く、夜は危険が増すことが多い。

だが実際、さっきから魔物の姿どころか気配すら無い。

いくら何でもこれは変だ。

そんな疑問を持ちながらも少年は前へまた……。

ガサッ

進もうとした時、近くの草むらから音が聞こえた。

第三章 魔物の住む森（後書き）

表現力とか色々足りないのは分かっている……。

それでも投稿する。

そうすれば何か分かると思うから。

b
y
Y
U
E

第四章 襲撃？

ガサッ

「!？」

何の気配も無い場所から突然、物音が聞こえてきたので、少年は直ぐさま戦闘態勢に入る。

胸元で大剣を留めているベルトを外し、鞘ごと大剣を構える。

油断していた！魔物の気配がないからと言っていたが、今の物音からして、かなり近くに居るようだ。少年は自分の今の状況に動揺しながらも、的確に行動をする。

少年は大剣を構え、警戒しながら物音のした方へ向く。

今まで気配が無い事から隠密系の魔物の確率が高い。

本来ならその場を動かず、しばらく様子を見るのだが。

夜行性の魔物は集団で行動するのが多い。

(主にウルフのなどの猛獣系、個体ではランクDのだが集団で行動するためランクC)

もし魔物がすでに自分の周りを囲っている場合、襲われるのを待つより、一ヶ所を切り崩し、その場を脱出した方が一人の場合は効果的だ。

頭の中で瞬時に何通りかの作戦を考え、その中で今の自分の状況

に最も適切なものを選ぶ。

その頭の回転の速さは熟練のハンターも舌を巻く物である。

そして少年は最悪の事態を想定して、その場の脱出を選ぶ。

そうと決まれば少年の行動は早い。

物音のした方向へ大剣を向けて、一直線に突っ込んだ。

邪魔な林を切って、闇の中を突き進んでゆくと、周りに木も林も何も無い草だけが生えた大きな広場の様な場所に出た。

「つつ！誘われたか！？」

集団で行動する魔物の中には知能の高い物がいる。

そいつがリーダーで他の魔物に指示を出す。

そして集団のリーダーがかなりの切れ者であるため本来ならランクCの依頼がランクBになる事がある。

そして、ここは魔物の住む森。

ダンジョンランクAのこんな所にいる魔物がランクC程度のはずが無い。

おそらく自分は魔物の縄張りに誘い込まれたのだ。

そう思った少年は、直ぐに元来た道に戻ろうとするが。

「！？」

後ろにはすでに魔物がいた。

そして、そこにいたのは。

「きゅっきゅー！」

なにやら意味の分からない声を出した、ワケの分からない生き物がそこにいた。

「はあ？」

少年も流石にこれには驚いた、と言うよりはもう何だか気が抜けた。

そこにいたのは、見た目は黒いドラゴンなのだが。何か小ささい。と言うか、もの凄く小さかった。

普通ドラゴンと言えば、ランクAに指定されている有名な魔物で。たった一頭で町を破壊すると言われる位、大きくて強いのだが。

「きゅー？」

目に前にいるのは、ぱつと見、三十センチほどしかなく。しかも少年の足元で可愛らしく首を傾げている。

こいつは、恐らくドラゴンの子供だと思っただが。

ドラゴンは数が少なく、最近では目撃例もあまり無い。

そしてドラゴンの子供には常に親のドラゴンが側に付いているた

め、さらに目撃例が少ない。

もしドラゴンの子供に合ったとしても親のドラゴンに襲われ、まず生きては帰れないからだ。

もしかして今まで魔物に出会わなかったのは、近くにドラゴンが居たからか？

それならば今まで魔物に合わなかった説明がつく。

ドラゴンは魔物の中でも膨大な魔力を持ち。その魔力が他の魔物を遠ざけるのだ。

だが今、この近くにそんな魔力は無い。

「もしかしてお前、親とはぐれたのか？」

気がつく少年はドラゴンに話しかけていた。

いや、べつにドラゴンが答えてくれるとは少年は思っていなかった、のだが。

「きゅー。(コクン)」

まさかの肯定!!？

ドラゴンはうなずいた。

そう言えばドラゴンにも幾つかの種類がいて知能が高いドラゴンもいたなー、と少年は思い出していた。

でもまさか人の言葉が分かるとは思わなかった。

「人の言葉、分かるの？」

一応、確認のためもう一度質問してみる。

「きゅう。(コクン)」

「またも肯定。」

「どうやら本当に分かる様だ。」

ドラゴンなんて人の一生で一度、合うか合わないかと言われる位、珍しいのに。

そのドラゴンと会話が成立するなんて誰が思うか？

しばらくは何を見ても驚かないな。

少年はしばらく茫然としてそう思った。

しかしこの、ちびドラゴンと何時までも居ると、そのうち親ドラゴンが現れるかもしれない。

「親が見つかるの良いね。」

そう言って少年は、この場を直ぐに離れ様とするが。

「きゅう。(カプツ)」

ちびドラちゃんが服に噛み付いて行かせてくれない。

一人でいるのが嫌なのか、それとも懐かれたのか。

しかしこのままだと。

「放してくれないかな、ちびドラちゃん。このままだと僕が君の親に殺されるのだが。」

それだけは、何としても避けたい。

「きゅーー。(うるうる)」

しかし、ちびドラちゃんは服を放すどころかももの凄く、うるうるした目で少年を見つめる。

その可愛さ、もはや反則である。

少年はそんなドラゴンを突き……………放せるわけ無く。

「親のドラゴンに合っても殺さないように言ってね。」

そう言うしか無かった。

「きゅー。(コクン)」

少年のパーティーにドラゴンが入った。

第四章 襲撃？（後書き）

初めは少年と少女の二人で物語を作ろうと思ったのですが、それだと何か足りないと思い。ちびドラちゃん（ドラゴン）を出しました。

それだと、あらすじと違うではないかと思われた方。すみません。

作者は初心者なんです。許してください。 土下座 orz

と言つか、話が初めに思っていたのと、かなり違う。

無事に終わるのか？
なんか不安。

そしてまだ、ヒロインの少女が出ていない。
次回こそは出します。

と言ってもまだ書いて無いけど……。

でっ、出るよ。たぶん……。

もし出無かったら、ごめんなさい。 m () m
今のうちに謝っておく。

こんな作者の問題だらけの小説ですが、よろしくお願いします。

b y Y U E

第五章 襲撃

「うつ……ん。こ、こは……？」

暗い森の中で、少女は重い身体を起こして気が付いた。

虚ろな目で周りを見渡す。

「私はどうして……、ここに……？」

影みたいな者に襲われて……、炎が……全てを燃やして……。

私は……、私は……、私は……？……、……、……、……！

「うつ、くうつ」。

急に頭痛と吐き気がして、口元を手で押さえる。

気持ち悪い。頭がグルグル回って、呼吸が上手く出来ない！

まるで、底の無い沼に引きずり込まれるように意識が闇の中に沈む。

「はーっ、はあーっ。」

なんとか呼吸を整えようとするが、上手くいかない。

息を吸おうとすると、のどに悶え^{つか}、息を吐こうとすれば肺が詰まる。

そして、少女を襲うのはそれだけでは、無かった。

「ぐうるる。」

闇に潜み少女を狙う魔物が二頭、三頭、四頭と、少女の周りを囲んでゆく。

鋭い牙に獠猛^{じつめい}な赤い目をした狼の様な姿。

牙は一度、捕まえた獲物は放さず、容赦^{ようじや}無く喰いちぎる。

赤い目は、闇の中でも決して獲物を見逃さない。

ランクBの魔物、ボルス。

集団で行動するウルフのなどの猛獣系の中でも特に頭が良く、こいつに一度、狙われると逃げる事は出来ない。

「い、や…。」

枯れそうな声で少女が言う。

もうすでに少女の周りを、ボルスが取り囲んでいる。

そして、獰猛な赤い目が少女を狙う。

「いや…。」

泣きそうな声で少女が言う。

計、六頭のボルスが少女を取り囲む。

少女に逃げ場は無い。

「い、いやあああああああっ！…！」

少年

闇に紛れて何かが蠢うごめいている。

さっきのは、この肩に乗っている、ちびドラちゃんだったが。こ
んどは違う。

「巧妙に闇に紛れているが、何体かの魔物の気配と魔力を感じる。」

恐らく、ウルフのなどの猛獣系だと思っただが、
魔物の狙いが自分では無い？

そのことに違和感を感じ少年は、魔物の気配をたどった。

魔物の後をたどると、そこには少女が居た。

「うそだろ！こんな所に何で女の子がっ！」

ここは魔物の住む森で女の子が一人で居るような場所では無い。

だが、たしかに少女はそこに居て。魔物は少女を狙っていた。

「……………や…。」

少女が何か言っている。

その間にも魔物は少女に迫る。

「つつ！ヤバイな。」

少女は魔法を使って、応戦しようとも逃げようともしない。

このままでは確実にやられる！

少年は近くに在った石を握り、石に魔力を込める。

「いや…。」

さっきよりも大きな声で少女が言う。

魔物は六体。

ランクBのボルス。

一人で相手にするには厳しいが。

ここで女に子を見捨てることは出来ない！

少年は大剣を構^{かま}える。

「い、いやああああああああっ！…！」

少女が叫んだと同時に少年は飛び出した。

第五章 襲撃（後書き）

小学生の頃、夏休みの計画表なるものを配られ。

計画を書き込むが……、一度も計画通りに行かない。

はい、小学生の頃から、まったく成長していない作者です。

少女、ようやく再登場。

本当は第三章で少年と少女が出会うはずだったのですが……。

初めは出る予定の無いドラゴンが先に出たりと。

……あれ？

何か初めに書いたプロットと違う……。orz

……。

プロット？なにそれ？おいしいの？（????????） ひらきな
おった！

by YUE

第六章 襲撃？

「い、いやあああああああつー！」

少女が叫んだと同時に少年は飛び出した。

少女との距離は五十メートル程、その距離を一瞬で少年は駆け抜ける。

そして、少年は魔力をこめていた、石を少女に向かって投げる。

「伏せろっ！」

少年は少女に向かって言った。

「!?!」

少女は何が起こったのか分からなかったが、反射的に頭を伏せた。

「光れっ！ 爆ぜえろー！」

少年は石に込めた魔力を一気に解放した。

石は頭を伏せた少女の近くで、白い光を放つ。

光は一瞬にして、辺り一面を白く染めた。

少年が使ったのは、遠距離の光による目潰し。

石に魔力を込め、それを投げる。そして石が目標の位置まで来たら、石に込めた魔力を光に変えて解放する。
すると石は光を放つと言う魔法である。

ボルスなどの夜行性の魔物は、夜でも獲物が見えるほど目がいい。しかしその代わりに極端に光に弱い。

これで一時的にボルスを混乱に陥れる。

その間に何体ボルスを倒せるかが勝負の決め手だ。

少年は一番近くに居た、二体のボルスの間に入り、一体の頭を大剣で叩き切る。

そして、そのまま大剣を横に流し、少年の横にいたボルスを薙ぎ払った。

バキツと骨が砕ける音がボルスから聞こえた。

残りは四体。

少年は少女の所まで残り三十メートル程の距離を、地面を二、三回蹴るだけで辿り着いた。

そして少女の近くに居るボルスを後ろから大剣で切ろうとするが、

ボルスは横に飛びのき大剣を避けた。

恐らく耳で少年が来る足音を感じ、とっさに避けたのだろう。
光魔法による目潰からまだ数分も経って無いのに、もう混乱が治りかけている。

さすがはBランクと言ったところか。

少年の大剣は空しく空を切り、地面に突き刺ささった。

ボルスはその少年の隙を逃さず、少年に襲い掛ろうとする。

しかし、少年は突き刺さった大剣から手を放して、襲い掛ろうとするボルスに右手を突き出して。

「アポロンよっ、太陽の火を掴み、その身を燃やせ！」

呪文を唱えて右手に魔力を集中させ、その手から業火を生み出す。

火は瞬く間にボルスを包み込む。

これで残りは三体。

「きゃあっ！」

後ろから少女の悲鳴が聞こえた。

少年が魔法でボルスを倒している間にもう一体が少女に襲い掛かろうとしたのだ。

「つつ、しまった！」

やはり、一人で六体を相手にするには無理があったかつ。

少年がそう思って、すぐに少女の元に向かおうとすると。

「きゅー！」

いつの間にか、少年の肩から離れたちびドラちゃんが、少女とボルスの間に飛んで居た。

「きゅーー、ゴオオオウツ！！」

そして、ちびドラちゃんは、自分の小さな身体を風船の様に膨らませ、口から炎を吐き出す。

ちびドラちゃんから出た炎は、その小さい身体のどこから、そんなに火が出るのかと言う位に大きく、凄まじいものだった。

少年がボルスを倒すのに使った魔法の倍はある威力の炎が、ちびドラちゃんから吐き出されボルスを襲う。

流石はドラゴンと言ったところか。小さくても、そこには空の王者と言われる者が居た。

「よくやったっ、ちびドラちゃん！」

「きゅー」。

ちびドラちゃんは褒められたのが嬉しいのか、飛びながら尻尾を振っている。

残り二体となった所で魔物は敵わないと思ったのか、残りは森の奥に逃げて行った。

後を追う積もりは無いので少年は大剣を鞘に納め、背中に背負う。

後に残ったのは大剣で叩き潰され、黒こげになった四体のボルスの死体と。

少年と少女にドラゴンだけだった。

第六章 襲撃？（後書き）

少年と少女がやっと出会いました。

これで物語が進みます。

そして、初めて戦闘シーンを書きました。

上手く書けているか心配です。

感想、誤字などありましたら、どんどん書いてください。

b y Y U E

第七章 十字を背負う少女

空がだんだんと明るさを増していく。

日はまだ昇^{のぼ}っていないが、もう直^すぐ夜^よが明^あけようとしている。

ボルスを追いついた後、女の子は緊張^{きんきょう}が解^とけたのか、それとも戦闘^{せんとう}の途中^{ちゆうちゆう}か、どつちか知らないが気を失っていたので、今は大剣^{たいけん}と一緒に背中に背負^{せお}って移動している。

ちびドラちゃんは空から見張^{みは}りをしながら、少年の頭の上を飛んでいる。

ボルスは追いついたものの、何時^{いつ}ボルスが仲間を呼んでまた襲^{せう}つて来るとも知れないので、気^き絶^{きぜつ}した女の子を背負^{せお}って、取りあえずその場を離れる事にしたのだ。

念^{ねん}の為^{ため}ボルスが後を追って来ないように、青魔法で水呼び出し、匂^{にお}いは消しておいた。

本当はあの場で少女に「何故^{なぜ}此^こ処^こに一人で居るの？」とか色々聞きたかったのだが、状況^{じょうきょう}が状況^{じょうきょう}なので仕方^{しかた}なくこうして背中に背負^{せお}って移動しているのである。

しかしこの姿勢^{しせ}。大剣^{たいけん}が邪魔で女の子が上手く背負えなくて疲れる。

少年がだんだん下に下がってきた少女を背負い直そうと上に持ち上げる。

「んっ。」

少女が声を出した。

「おっ！気が付いたか？」

少女はまだ気を失っているが、顔に表情が戻った。

少女が意識を取り戻しそうなので、少年は立ち止まり、近くの木に少女を背中から下し、木に寄りかからせる。

少年が止まった事に気付いたちびドラちゃんも、空から少年の肩に降りる。

「大丈夫？気分は悪くない？」

顔色が悪い少女に少年は心配そうに声を掛ける。

「きゅっ。」

ちびドラちゃんも心配そうな声を出す。

「くっ…んっ。」

少女は何かにつなされているような、苦しい顔をしている。

「しかし、黒髪か……。」

少年は少女を見て、そつと眩くらいた。

ボルスとの戦いでは、夜で周りが暗く、戦闘中で気がつかなかったが、少女の髪は黒かった。

黒髪や黒眼はこの世界では、酷ひどく嫌われている。

理由は多いが、一番の理由に黒は不吉の証として、この世界中に広まっているからだ。

始まりは古い歴史からだ。

その昔、今から400年ほど前、世界がまだ一つで無かった時代。この世界には4つの国がありました。火の国、風の国、水の国、土の国、この4つの国があり、それに囲まれる様に、当時、国では無かったが、アイザリアと言う土地がありました。

4つの国はこの地を狙い、もう何十年も前から互いに、にらみ合い、自分の国の領土にしようと、争っていました。アイザリアには

魔法資源が豊富に在り、住みやすい土地で、どの国も、その土地を欲しがっていたからです。

4つの国が戦いを初めて、終わらない戦いが何年も続き、月日はかりがたつた。ある日、黒い髪と黒い目をした、夜の一族と言う者たちが何処どこからか現れ、世界を支配しようとしたのです。

夜の一族は強力な魔法と武器で、瞬く間に、世界を戦乱の渦に巻き込み、世界を恐怖と混沌の時代にしました。4つの国の王は、夜の一族の強力な魔法や武器に恐れをなして、もう世界は終りだと思いました。

しかし、その時、光の力を宿した勇者が現れ、夜の一族を倒していったのです。勇者は言いました。今は互いに争っている時ではなく、共に力を合わせて、強大な敵に立ち向かう時だと。その言葉に心を打たれた4つの国の王たちは、勇者を中心にして集まり、力を合わせて夜の一族に立ち向かう事になりました。

力を合わせた4つの国はとても強く、夜の一族はやがてアイザリアの中央に追いやられてゆき、最後の抵抗をし、滅びました。

その後、最後の戦いの場となった場所に王宮が建ち、勇者はアイザリアの王となり、光の国として、4つの国を統べる国として建国され、世界は一つになり、平和になりました。

これが、この国の、いや、世界の歴史。

だから、いまだに、黒色や黒髪黒眼は嫌われている。だが、夜の一族はたしかに400年前に滅びた。だが時たま、なんでもない、ただの夫婦から、黒い髪や目をした子供が生まれてくる事が、ごく稀まれにあり、呪われた子と言われ、非難ひなんや差別にあう事がある。

何故、黒い髪や目をした子供が、生まれて来るのかは、謎だが、昔から人々から、嫌われているのは確かだ。酷ひどい場合は親からも見放され、捨てられる子も、居たそうだ。

400年経っても戦いの傷は癒えない。

だが、その責任を無関係の人が、背負わされるのは許せない。

きっと、この少女も酷あつかい扱いを、受けたのだろう。でなければ、この魔物の住む森に少女が一人で居るはずがない。

そう思うと、少年はどこか辛そうな顔で、少女の手を握にぎった。

そして、少女が目覚める様にと、声を掛け続けた。

＊少女＊夢＊

私に居場所なんてなかった。

理由なんて分かっている。

夜の一族。

悪魔あくまの娘むすめ。

私みたいに髪と目が黒い女性を人々はそう呼ぶ。

髪と目が黒いのは呪われた悪魔あくまの印しるしだと。

故ゆえに私は悪魔の娘。

汚らわしいとさげすんだ目で見られ。

あっちへ行けと石を投げられる。

私をさげすみ、あざ笑う人々。

髪と目の色が違うと言うだけで、汚い泥をかぶせられる。

どこにも私の居場所なんて無かった。

汚らわしい薄汚い悪魔の娘。

髪と目の色が普通の人と違う。

それだけの理由でなぜこんなめに合わなくてはいけないのか。

私は何もしていないのに。

何も……して……いないのに。

いくどとなく思ったことだが、もう疲れた。

「……………い、…。」

……………なにか小さな声がする。

「お…い、…。」

どこかで聞いたことのある声だ。

「…だい……………ぶ…か？」

どこで聞いたのかな？

「……………しっかりしろ！」

さっきよりも、はっきりと声が聞こえる。

そういえば私、魔物に襲われて、それから……………。

それから……………だれか、が…来て……………？

だれ、だっけ？

「おい、しっかりしろ！」

ああ…、この人だ。

「大丈夫？」

やさしい、声が聞こえる。

こんなやさしい声を聞いたのは何時いつ以来いらいだろう。もしかしたら、初めてかもしれない。

でも、あなたも、私の髪と目を見れば、私から逃げるの。

そして、これは夢。

だから、この声も私の夢で幻まぼろし。

ならばもう少し、この声を聞きたい。

第七章 十字を背負う少女（後書き）

シリアスな感じで書くつもりだった。

b y Y U E

第八章 十字を背負う少女？

声を掛けても、少女は全く、目を覚まさない。

やはりボルスに襲われた時に、どこか怪我けがをしたのではないかと不安になり、少女の身体を検査していく、腕、足などには目立った傷は見えない。

ならば服で隠れている体か？と思い、少女の身体に、自分の魔力を流す。

こづすると自分の魔力が、少女の身体を血の様に巡りめぐ身体の中を探ってくれる。なにか悪い所があれば魔力の流れが悪くなるので分かる、という仕組みだ。

そうして、少女の身体に魔力を流していくと胸のあたりに明らかに違和感いわかんを感じた。

そして、悪いとは思ったが少年は少女を横に寝かし、服の胸元を小型のナイフで切った。

すると胸の少し上に刻印こくいんが映うつっていた。

「つつ！これは！」

少年はその刻印を見て驚いた、と同時に怒りも感じた。

刻印は、恐らく奴隷の刻印。実物を見るのは初めてだが、本で見たことがある。魔術的な契約を元にした奴隷の刻印。

物によつては、本人の意思に関係なく主の命令なら絶対服従させる事でさえ、可能な最悪の魔術。

このような魔術は奴隷制度と、ともに400年前に禁止、および廃止され、今では知るもさえ、居ないはずだ。

少年でさえ、王国の秘蔵図書の中の禁書棚で偶然、見つけて知っているだけで、今では奴隷なんて見る事もない。

だが禁止されても、それをやる愚か者は、いつの時代にも居るものだ。

現にこの少女は奴隷の刻印を受けている。

言葉に成らない怒りが少年の体に巡る。

恐らく、この刻印が少女を縛りなんらかの悪影響を及ぼしているのは、間違いない。

刻印を見ただけでは、どのような契約、制約がなされているかまでは分からないが、この刻印をなんとかしないと……。

少年は少し考えて、腰に付けてあるポーチからある物を取り出すと呪文を唱えだした。

—————
少女

なにか、身体を包むような温かさに釣られ、少女は目が覚めた。

身体の重さを感じながらも、どこか楽になったきがして、少女は重い身体を起こした。

そして、何度か目元をこすって目を開けると。

「起きたかい？」

知らない少年が目の前に座っていた。

いや、知らない事はない。たしか私を、魔獣の群れから助けてくれた……。

そう言えば何故、私を助けてくれたのだろうか？

少女は、ふと、疑問に思った。

この人は魔獣の群れから、私を助けた後も面倒めんどうを見てくれた様だ。私の様な呪われた子を。

誰もが皆、私を避けるのに……。

「あの……。」

それは、少女がやっとの思いで踏み出した、一步。
聴いてみようと思った。

拒絶されるかも、しれないけど。

「えっと……。」

でも、なにを聴いたら、いいのだろう。

自分から他人に話し掛けるなんて、したことがなかった。

でも……、まずは……。

「貴方は……、だれ？」

少年のことを知ろうと思った。

知りたいと感じた。

この時、少女は初めて他人に興味きょうみを持った。

—— *少年*

少女の刻印の始末をつけた後、少年は少女にヒーリングの魔法をかけていた。

刻印の影響で、身体を巡る魔力が正常に流れていなかったため、それを戻すためだ。

右手をかざして、少女の身体を流れる元に戻す様に、自分の魔力を流して少女の身体の魔力を誘導ゆうどうし、

ついでに呪文を唱えて少女の身体を癒す。

だいぶ良くなった所で少女が起きた。

横になっていた身体を起こして、目をこすっている。

「起きたかい？」

とりあえず声を掛けてみた。身体の異常はもう無いはずだし、少女の意識がしっかり、しているかどうかを、確認してみたかった。

すると少女は少年を見て、少し考える様はしぐさをした。そして。

「あの……。」

声を掛けてきた。

そういえば、この子とはまだ何も話していないなど、少年は思った。

ボルスの事や刻印から治療まで、ずっと少女の傍そばに居たのに、何も知らないな、と思った。

「えっと……。」

すると少女が、何を話したら言いのだろう、という様な顔でこっちを見ていた。

ならば自分から話そうとした時。

「貴方は……、だれ？」

少女がそう問いかけた。

その時の少女の黒い瞳は、なにかを期待きたいする様なキラキラした目で、夜の星空の様に綺麗だと、少年は思った。

第八章 十字を背負う少女？（後書き）

まさか、一年たってこの物語の続きを書くとは、思っていなかった。

まあ、自分のペースでやるか。

b y Y U E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083k/>

果てしないこの世界

2011年10月6日20時47分発行